魔海少女ルルイエ・ルル

羽沢向一
挿絵／ピエール☆よしお

あとみっく文庫

あとみっく文庫／PDF立ち読み版

CHARACTERS

深海ルル（しんかいるる）

海の底からやってきたクトゥルフの娘。地上の視察に来た、という名目だが実際は遊んでいるだけ…？

亜州院亜理紗（あしゅういんありさ）

奈緒也のクラスメイトで傲岸不遜なお金持ちのお嬢様。高飛車な性格でＦカップ爆乳のグラマー美人。

深城奈緒也（みのきなおや）

ルルに居候されることになった愛倉学園の二年生。まじめで内気なので、亜理紗のいじめの標的にされている。

溝口椿（みぞぐちつばき）

奈緒也とよく本の話をする文学少女。外見に反して隠れ巨乳の持ち主。人に言えない秘密があるらしい。

団正文（だんまさふみ）

奈緒也と仲がいいクラスメイト。亜理紗にいじめられることを喜んでいるマゾ。

CONTENTS

◉第一章　風呂に這いよる者 ……007
◉第二章　転校生の呼び声 ……062
◉第三章　未知なる秘密クラブに夢を求めて…090
◉第四章　淫靡屋敷(いんびハウス)の影 ……136
◉第五章　好意の王 ……197
◉第六章　触手エッチの怪 ……259

ルルが部屋の前から廊下を移動すると、ドアが閉められ、外から鍵がかけられる。同時に奈緒也が叫ぶ。
「ルルをどこへ連れていくんですか！」
閉まったドアの向こうから聞こえたのは、たったひと言だった。
「ルル様よ」
「ルルっ！　そんなこと、言ってる場合じゃないだろう！」
スキンヘッドがニタニタと笑って、部屋の壁にかけられた小さな布をカーテンのようにずらした。そこに長方形の窓が現れる。
「心配すんな。おまえらにも、チビがどんな目にあうのか、ようく拝ませてやるよ。ここはマジックミラーになってるから、覗いてみろ」
スキンヘッドの顔は、見せたくてたまらないという表情だ。断ったら殴られそうで、奈緒也と梢はすごすごとスキンヘッドと並んで窓を覗きこんだ。
途端に、奈緒也と梢は目を剥いた。
マジックミラーの向こう側は、もちろん秘密基地などではなかった。
秘密クラブだ。
音も声も聞こえてこないが、見える光景だけでどういう場所なのか、すぐにわかる。
一見豪華そうで実際はあまり金のかかっていないソファとテーブルが並び、洋酒のボト

ルとグラスと簡単なつまみの皿が乗っている。ソファに座る数人の客は、やくざたちとは違い、普通のスーツとズボンだが、あまりまともな商売をしている人物にも見えない。

接客している美女たちは、全員がコスプレしている。チアガール、レースクィーン、キャビン・アテンダント、競泳用水着などなど、衣装自体は特に改造してない。

奈緒也と梢の目を剥かせたのは、コスプレ美女の露骨にエロいサービスだ。客たち全員が、手で女の胸を揉み、指をスカートの中に突っこんでいる。両腕で異なる学校の制服の娘を抱きかかえて、交互にディープキスをくりかえしている客もいた。女たちの顔を見ていると、好きこのんでやっているようには思えない。

これがエッチなビデオの演技なら、奈緒也も自然と股間を硬くしていただろう。だが現実の光景を前にして、嫌悪感しか覚えなかった。

梢はマジックミラーから顔をそむけて、吐きそうにしている。

スキンヘッドだけがにやけた顔だ。

「へへッ。あの真ん前に座ってる山村のジジイ、二人のなんちゃって女学生の舌を吸ってる奴な、しゃれにならねえロリコンなんだぜ。ルルとかいうチビみたいなのが大好物だ」

小窓の向こうの山村という人物は、ロマンスグレイの髪をきちんとなでつけて、シルバーフレームの眼鏡をかけた五十代の人物だ。やっていることはともかく、外見だけなら初老の学者紳士に見える。

「ルルにあんなことをやらせるなんて！　壊した車の弁償なら、ぼくがなんとかしますから、やめてください！」
奈緒也の懇願に、また凶悪な笑いが返ってくる。
「もう車の弁償なんか、どうでもいいのさ。俺たちの目的は、あのチビなんだからな」
「それはどういう意味なんですか？」
スキンヘッドの返答はなかった。そ知らぬ顔で秘密クラブの恥態をながめている。
窓から顔をそらしていた梢が、積み上がったエロ雑誌の上に一枚の写真を見つけた。すばやく手に取り、奈緒也に向ける。
「これ、見て。流家さんよ」
確かに黒板を背にしたルルの顔写真だ。今朝の二年四組の教室で、クラスの誰かが写メで撮ったものを、パソコンでプリントしたものだろう。
「どうして、ルルの写真が⁉」
「亜州院さんの仕業ね。亜州院さんが流家さんの写真を配って、見つけたら、ひどい目にあわせるように命令したのね。恥をかかされた復讐よ」
「いくらあの亜理紗でも、そこまでやるかな」
「傲岸不遜で傍若無人な亜州院さんなら、平気でやる」
奈緒也には予想外の梢の辛辣な言葉にも、やはりスキンヘッドは応じない。だが表情が

肯定を伝えた。
「でも、おかしいよ。どうして亜理紗の命令で、この人たちが動くんだ？」
「亜州院工業が韻ヶ埼の暴力団とつながっていることは有名よ」
「そ、そうなんだ」
梢がそんなことにくわしいのもまたもや意外だが、当の暴力団員の前でさらっと言っていいのかと不安になる。だがそれ以上に怒りもあった。
「亜理紗をたんなるわがままお嬢様だと思ってたけど、ここまでひどいことをするなんて許せないぞ。あっ、ルルが！」
「流家さん、あの衣装！」
マジックミラーの向こうに、ルルの姿が現れた。左右に、パンチパーマとクラブの支配人然とした中年男がついている。
ルルはピンクのヒラヒラワンピースから、別のコスチュームに着替えていた。
白い体操服と紺のブルマーだ。
足には白いソックスに、かわいいデザインの女の子向けの運動靴。
奈緒也と梢が通った学校はいずれも、体育の授業は女子も短パンだった。実際にブルマーを穿いている女子を見るのは、今がはじめてだ。
体操服とブルマーを着たルルは、ますます子供っぽく見える。フリルで飾ったワンピー

スでは隠されていた胸のふくらみが、薄い布の表面に現れていた。正確には、胸の小さが、はっきりと現れている。

ささやかなふくらみの先端に、小さくポチッとしたものが見えているのは乳首に違いない。もともと必要なのかどうかわからないが、今は確実にノーブラだ。

体操服の裾は、あきらかに普通のサイズより短い。そのためにブルマー全体が見える。ハイレグやティーバックに改造されたものではなく、へその下から下腹部と尻をすっぽりと包みこむ、本来の姿だ。ショーツも穿いていないらしく、尻の谷間と恥丘の縦筋が紺の布に刻まれている。

女の秘密の部分が浮き出ていても、愛らしい童顔と低くて華奢な体形のおかげで、卑猥な印象はあまりない。他のコスプレ美女たちが嘘くさいがゆえにセクシーに感じるのに対して、ルルは本物の子供のようだ。そして、その顔は。

（やっぱり面白がってる！　ルルはこれから自分がなにをさせられるのか、本当にわかってるのか。これはドリームなんとかっていうゲームじゃないんだぞ）

奈緒也の心の叫びは、ルルにとどきようもない。

クラブの中の言葉も、奈緒也には聞こえなかった。クラブ支配人の口が動く。

「本日入ったばかりの新人でございます。山村様のお好みに合うかと存じまして」

山村が両脇に抱えた偽女学生をぞんざいに突き飛ばし、前へ身を乗り出した。ルルの童

顔を見つめる顔に、今まで以上にあさましい欲望の色が塗られた。
「ほう。よくわかっておるじゃないか。お嬢ちゃん、名前はなんていうのかね」
「流家ルルよ。あなたにも言っておくけど、わたしの眷属の奈緒也になにかしたら、ここにいる全員にひどいことをするからね」
あまりにも意味不明な言葉に、パンチパーマと支配人が苦笑した。
「もうしわけありません、山村さん。眷属というのは、この子の連れのことらしいんですがね」
「かまわんよ。こういう子も、またいいものだよ」
ルルは完全に頭の弱い子あつかいされている。幼児をあやすように、山村が猫なで声をかけた。
「いいとも。もちろん、ルルちゃんの眷属にはなにもしないよ。だから、おじちゃんの膝の上に乗るんだよ」
山村が右手で、左の太腿をたたいた。
ルルはまたニッコリと笑った。
「いいわ。ますます、わたしに与えられた知識そのままね。あなたが陸の上でいう狒々爺（ひひじい）でしょ」
ルルの悪態に、さすがに支配人もパンチパーマもあわてた。だが言われた当人は、まっ

たく気にしていないようだ。高価な眼鏡の奥の目をあさましくぎらつかせる。
「そうだよ。おじちゃんこそが狒々爺だよ。狒々爺は、ルルちゃんみたいな子が大好物なんだよ。早く膝に乗ってくださあい」
やくざもげんなりする山村の気持ち悪さにも、ルルは臆することなくテーブルの縁をまわり、右脚の上にブルマーの尻を乗せた。
山村の学識者らしい顔が、太腿にかかる美少女の体重を堪能して溶け崩れる。
「ルルちゃん、軽いねえ。この軽さがいいねえ。さあ、おじちゃんとキスしようね」
「それはイヤ」
「なんだって！」
山村以上に、パンチパーマと支配人が顔を歪めた。
ルルは両脚をブラブラさせ、二つの運動靴のつま先で山村のもう一方の足を、何度も軽く蹴る。
「キスはそのうち眷属とする予定なの」
この言葉は、奈緒也と梢に聞こえなかったのは幸いだったろうか。
「でも、狒々爺のペニスなら、いじってあげてもいいわ」
「ええっ、本当かい。じゃあおじちゃんのおちんちんを、シコシコしてもらおうね」
いよいよ山村の猫なで声がひどくなる。

ルルは平気な顔で両手を山村の股間へ伸ばし、さっさとズボンのベルトをはずし、ファスナーを下ろした。現れたトランクスは、赤地にペロペロキャンディをちりばめた大人げない模様だ。

両手の指をトランクスの前開きから中へ入れて、すでに勃起している肉幹をつかむ。触っただけで、昨夜の奈緒也よりもサイズが大きいとわかった。

「ルルちゃんの手はちっちゃくて、やわらかくて、すべすべしてるね。指もとっても細い。おじちゃんのおちんちんによくなじむよ。おじちゃんのおちんちんをシコシコするためにある手だねえ」

「ペニスがもうカチカチよ。本当にどうしようもないド変態ね」

ルルの辛辣な言葉も、初老の紳士にはご褒美だ。

「たまらないね。ルルちゃんみたいな小ちゃな女の子が、エッチなことを言うのは、おじゃんは大好きだよ」

うっとりとした顔と声で語る初老の男の勃起ペニスを、ルルがトランクスの外へ引っぱり出した。他の客も、他のコスプレ美女たちも、なにも言わない。このクラブでは、こういう行為もあたりまえなのだろう。しかし全員の目に、ロリコン男への無言の軽蔑が浮かんでいる。

山村のふくらんだ亀頭はきれいに剥けていた。ルルの指が遠慮も躊躇もなく、赤く色づ

いた肉のたぎりを包む。
「くほ――――――くほほぉおうう！」
犬が鼻を鳴らすような高い音が、初老の口から長くあふれた。笑っているのか、喘いでいるのか、わからない音色だ。
「ほ――――くほう、ほほう、くっほぉぉぉぉ――――、いいね、いいねえ」
ヌチッ、ヌチチ、ズチッ、とルルの小さい手が亀頭とこすれる音が鳴る。
「変態、へんたーい！　狒々爺の狒々ペニスなんか、こうしてやるわ」
亀頭への刺激とともに、かわいい声での罵倒を浴びせられて、山村の知的な額に血管がビキビキと浮き上がった。
「ルルちゃんのかわいい手は、最高だよほほおう」
山村の蕩けた歓声は、隣室の奈緒也たちの耳にはとどかない。しかし初老の紳士の歓喜の顔と、ルルの手の動きははっきりと見える。
そして奈緒也の耳に、スキンヘッドの下品な笑い声が入った。
「おいおい。あのチビ、自分から進んで手コキしてるじゃねえか。とんでもないエロガキだな。もしかしたら、おまえもチビにやってもらってるのか？」
本気が冗談かわからない、しかし真実を言い当てた言葉が、奈緒也に突き刺さる。胸の中で渦まく感情は、自分も同じことをされて悦んでいたことへの羞恥なのか、片思いする

（これが本物のキスの音なんだ。すごく気持ちよくて、すごくエッチだ）
「んっ、んむぅぅ……ふはあ……」
「くふっ、むんんん、はあああぁ……」
熱い吐息を混ぜながら離れた口の間に、唾液の糸がつながる。
「はあっ、深城君」
「奈緒也と呼んでよ」
「うれしい。奈緒也君も、わたしを梢と呼んでほしい」
「うん、梢さん」
強く抱き合ったまま、自分でも甘ったるいと思う会話を重ねて、またキスをくりかえした。唇が密着するほどに、舌がこすり合うほどに、互いの唾液をより美味に感じる。
（もっとキスしていたい。でも、他のこともしたい！）
身体の中に募る欲望を先に口に出したのは、神の娘のほうだ。
「奈緒也君、こんなことを言うわたしを、笑わないで。奈緒也君に、もっといやらしいことをしたいの」
言ってから、梢は真っ赤な顔をぷるぷると左右に振る。
「あああ、やっぱりわたしは人間よりも淫らな生きものよ。はじめてなのに、平気でエッチなことを言っちゃうもの。恥ずかしいことを言ってるとわかっているのに、口を止めら

れないもの」
「ぼくは神の信徒だよ。神の娘の言葉には、ありがたく従うさ」
「よかった。奈緒也君。祭壇へ来て」
梢が、奈緒也の右手を引いて、黒い岩の彫刻へと向かった。近づいて見ると、彫刻の中央部が前に突き出していて、手術台のように平らになっている。うながされて、奈緒也は祭壇の端に腰かけた。
祭壇はけっこう高く、ちょうど奈緒也の股間が、祭壇の前に立つ梢の巨乳の前に位置する。
梢がトレーナーのパンツのゴムに指をかけて、中の緑のトランクスごと引きずり下ろした。床から浮いている足先からパンツが抜けて、下半身が完全な裸になる。
露出した股間から、すでに硬くなったペニスがピョンと立ち上がる。肌色の皮を被った亀頭が、元気に梢にあいさつした。
（わ、すっごく恥ずかしい！）
奈緒也は平気な表情を保とうと努力しながら、内心では濡れ雑巾のように身を絞る。恋愛感情のないルルと亜理紗に男性器を見せたときとは、次元の違う恥ずかしさに襲われてしまう。
（ひ――――、梢さんに、勃起しているのを見つめられてるううう）

「ああ」
と、梢が感嘆の喘ぎを吐いた。
「奈緒也君のおちんちんが、こんなに大きくなってる。すてき」
言ってから、両手で口を押さえて、真っ赤な顔をぷるぷると振る。
「はっ、恥ずかしいっ！　またエッチな言葉が、勝手に口から出ちゃう！」
「いや、言われてるぼくのほうはもっと恥ずかしいんだけど」
「ご、ごめんなさい」
「ひょっとして読書家の梢さんは、怪奇小説の他にも官能小説も愛読するタイプかな？」
「そ、そんなエッチな小説、買ってない。ただ溝口の父がこっそり隠していた宇能鴻一郎（うのこういちろう）先生の『女ざかり』を見つけて、違うから。読んでいないから！」
懸命に弁解しながら、梢の視線は亀頭に集中して離れない。ふくらんだ亀頭が前後にピクピクと首を振るのに合わせて、わずかに瞳が動いている。当人は気づいていないようだが、舌が唇を舐めて、唾液で濡らした。
（梢さんの意識は可憐な女の子のままだけど、本当に身体がいやらしいんだ。これも神の娘が人間として育ったせいなのかな。でも、そんなところも、すごくかわいい）
梢が探求心に煌めく瞳を、亀頭から奈緒也の顔へ向ける。
「あの、おちんちんに、その触っていいかしら」

「どうぞ、触ってください。ああ、なんか、ものすごく変なことを言ってる気がする」
梢が両手を差し出し、右手で皮を被ったままの亀頭を包みこみ、左手で肉幹を握る。
「はうっ！」
と、奈緒也が出した声よりも大きい声が、梢の喉からあふれた。
「はぁああん、熱いい！」
梢の指が動く。指と掌を、勃起した男根全体に這いまわらせる。性技ではなく、愛しいものを慈しむ動きだ。ペニスの形状、肌触り、体温を感じつくそうとしている。
梢の体内から湧きあがる情熱が、指先からペニスに伝わり、奈緒也は冷たい石の祭壇に乗せた尻を自然とくねらせていた。
「ああっ、梢さん、すごく気持ちいい。たまらない」
「わたしも、気持ちいいの。はっああん、こうして奈緒也君のおちんちんをなでていると、身体中が気持ちよくて、熱くなっちゃううう……」
神の娘としての本能に導かれて、梢は顔を奈緒也の股間へ近づけた。考えるよりも先に、頬を睾丸へ押しつける。きめ細かい頬の肌に押しつけられて、二つの肉の袋がふよふよと形を変化させる。
「あぁぁあ、奈緒也君の玉が当たって、とてもいい気分。男の人の玉って、想像していたよりもはるかにやわらかくて、プニプニしてて、最高」

睾丸に頬ずりされるという予想外の愛撫に、奈緒也も歓喜の声をあげた。
「ぼくも、梢さんの顔に玉をこすられて、腰が溶けちゃいそうだ。ひゅへあっ！」
変な声が出る。梢が頬ずりだけではものたらず、舌で睾丸を舐めはじめたのだ。
ネロッ……ヌロゥウ――――ピチャペチャ……。
様々な音色を奏でて、舌が睾丸の皺の上を這いまわり、唇がしゃぶりつく。
「んっ、うふうっ……はむっんん……あぁぁぁ、奈緒也君の玉、すごくおいしい……はんんん……」
手も休んでいない。唇と舌で睾丸を堪能している間にも、十本の指がペニス全体をこすってさすりつづけている。
ここに至って、ようやく梢は重大なことに気づいた。睾丸から肉幹の付け根を舐めまわしながら、上目づかいで亀頭に目を凝らす。
「皮を被ってるよね」
手と口の奉仕に蕩けた奈緒也の顔が、サッとこわばった。
「えっ、ご、ごめん。それは、その」
うつむく奈緒也と視線を対峙させて、梢がお願いする。
「わたしが剥いてもいい？」
「うん」

「うれしい！」
亀頭をつかむ梢の指に、力がこもる。クトゥルフの娘が触手で一気に剥き下ろした皮を、ハストゥールの娘はそろそろと慎重に下げていく。中から現れる亀頭の本体を、宝箱を開けるような表情で見つめる。
「こんなふうになってるのね……濃いピンクで……パンパンになっていて……」
梢の言葉に反応して、勃起が何度も跳ね上がる。
「そんな仔細に描写されると、かなり恥ずかしいな」
「亀頭ってかっこいい！」
「そうかな。あの、お願いがあるんだけど」
「言って。奈緒也君が望んでいることは、なんでもしたいの」
愛する人間の男から望まれる悦びに、神の娘の顔が明るく輝いた。一瞬、奈緒也の脳裏に、地球の外にいるという父親の神は、どう思うだろう、という考えがかすめる。しかしすぐに燃える欲望の炎に消された。
「パイズリしてほしい」
梢がコクリとうなずき、両手でボンデージスーツのハーフカップを下へずらした。ふよん、と左右の白い乳房があふれ出る。
同時に、奈緒也の喉からも歓声があふれ出た。

「ふわあ、大きい！」

ハーフカップから解放された途端、ボリュームがさらにアップしたようだ。まさに神の娘が体現する宇宙的驚異としかいいようがない。白いクリームを固めたような二つの巨峰乳は、みっしりした重量のために、乳房がわずかに垂れたが、堂々たる迫力で奈緒也に迫り、圧倒してくる。

突き出した乳肉の先では、淡い桜色の乳輪が可憐に色づき、バストサイズにふさわしい高い突起がピンとしこり勃っている。

（もう、乳首が勃起してる！　ぼくのモノに触れているだけで、完全に興奮しちゃってるんだ……）

左右の肉筒は、色はやさしげな桜の花びらだ。しかし、いきり勃つ様子は、血液が集まり、神経が張りつめて、クリトリス以上に敏感になっていそうだ。

（梢さんの乳首に、ぼくの指で触れたら、どんな喘ぎ声を出すんだろう）

と、妄想せずにはいられない。

「ど、どうかしら。わたしの胸は？」

梢が両手で乳房を支え、さらに奈緒也へ突き出した。キスに手の愛撫、さらに睾丸への舐め奉仕で、体温が上昇しているために、白い乳肌にはしっとりと汗が浮いている。汗の輝きが、巨乳の魅力をいっそう増している。

奈緒也はがまんできずに、両手を伸ばし、乳首をつまんだ。
「きゃひっ！」
甘い悲鳴を発して、梢がのけぞった。しかし乳首を強くつまむ指からは、けっして逃れようとしない。逆に、とろんとした顔で、自分から前へ出ていく。
「あっ、はぁぅうん、感じちゃう！　乳首が感じすぎるのうぅぅう！」
梢の悲鳴は、確実にもっと感じさせてと訴えている。奈緒也はうなずき、さらに乳首を引っぱって、自分の太腿の間に巨豊乳を招き入れた。自然と乳房の表面が左右の内腿に触れ、乳肉がペニスを挟みこみ、押し包む形になる。
「ああん、わたしの胸が、奈緒也君のおちんちんを挟んでる。あっんん、熱い。熱くて胸が煮たっちゃうぅ！」
梢が両手を乳房にそえて、左右から押した。最大限に膨張したペニスが、寄せられた白い乳肉の挟間に没して、二人の視界から消える。
「ああ、もっと熱い。うっんん、もっと奈緒也君のおちんちんを、はっきりと感じる。わたしが胸で奈緒也君に喜んでもらうのではなくて、あふぅぅん、おちんちんでわたしの胸を愛されているみたい……」
「ぼくも、たまらない。あああ、梢さんの胸はやわらかくて、ペニスにも、太腿にも、腹にも、ぴっちりと吸いついてくる。ぼくの下半身がとろとろに溶けて、梢さんに吸いこま

れそうだ」

梢が自分の豊満乳をこねはじめた。内側に男根を挟んだ美白の肉塊が、縦横無尽に形を変化させて、愛する男のシンボルを揉みしだく。

奈緒也も乳首をつまむ指にさらに力をこめて、引いたり、押したり、上下左右に揺さぶったりする。

二人の共同作業となったパイズリは、梢にも、奈緒也にも、大きな快感をもたらす。いや、二人がかりで責められる梢のほうが、より悦楽が深く、激しい。もともと大きな乳房に悦びの熱が充満して、パンパンに張りつめている。

奈緒也によじられる乳首も、ますます硬さを増して、今にも母乳が出るかと錯覚しそうだ。

梢は立っているのもつらそうに、ダークブルーのハイレグを食いこませた腰を、前後左右にくねらせつづけている。ロングブーツのハイヒールが、床板を小刻みに踏んで硬質の音をたて、快感の頂点が近いことを伝えるモールス信号を刻む。

「あっ、ふっあぁぁぁ、ごめんなさい、奈緒也君……はっうんん、せっかくおちんちんに気持ちよくなってもらおうとしているのに、んっ、んあぁぁ、もうわたしのほうが先に、ダメになってしまいそう……」

「もしかして、パイズリで梢さんがイクの!?」

「そ、そう。わたし胸だけで、イッちゃう。ふやあああ、はっ、恥ずかしい！　恥ずかしすぎるうぅうん！」

絶頂が迫ることを告白する梢の言葉と表情が、奈緒也の官能の炎に油をそそいだ。梢が痛がるかもしれないという懸念を忘れて、弾力を増した乳首を指で押しつぶしてひねる。

「あひいぃぃっ！」

悲鳴をあげる梢の胸へ、奈緒也は腰を突き上げた。今までは乳肉に揉みくちゃにされるばかりの男根が、自分の意志でぷりぷりの柔肉をこすりあげていく。

「はっんんっ！　突かれてるの！　奈緒也君に、わたしの胸がえぐられてる！　乳房も、乳首も、最高に気持ちいいぃぃぃぃぃぃぃ――――――――っっ!!」

イクとは言わなかったが、それが絶頂の叫びだと、はっきりとわかった。奈緒也の射精のスイッチを入れたのは、直接の刺激ではなく、梢の魂を蕩かす叫び。

精巣から放たれた猛烈な奔流が、尿道を焼く勢いでせり上がる。

「おおっうっ！　出る！　ぼくも出すよぅっ!!」

二人の手で愛撫される乳柔肉の挟間で、亀頭がふくらみ、果てたばかりの乳房をもっと刺激する。鈴口から精液が爆発した。

ジュブッ、ズブジュブ、ジュリュッ！

「はひぃぃっ！　出てるの！　わたしの胸の中で、奈緒也君の精液があふれかえってるう

うううっ、はふぁぁ、もっともっと最高に感じるうううううぅぅ――――――――っっ!!」
絶頂に新たな絶頂を重ねて震撼する乳房の挟間に、大量の精液が広がり、乳肉の合わせ目から四方へどっとあふれかえった。梢の大人びた美貌にも、白い飛沫がドロドロとぶちまけられ、火照った顔をさらに熱する。
「はああっ、あぁぁぅうんんん……」
梢は大きく息を吐いて、胸に精液まみれのペニスを挟んだまま、奈緒也の腹にしなだれかかった。乳房からあふれ出る精液を、ほとんど無意識のうちに舌で舐め取り、口の中に運んでいる。
「んっ、んちゅ……あむ、あああ、おいしい……」
自然に形作られる扇情的すぎる容貌を見せつけられて、奈緒也の勃起は収まるどころか、二度目の射精を求めて火を噴いた。
「したい！　梢さんとセックスしたいんだ！」
奈緒也の叫びに、岩の祭壇に彫られたハストゥールの眷属たちが身じろぎして、岩壁全体が蠢いたようだ。
「わたしも、奈緒也君としたい！」
ヒュウッ、と空気が鳴った。密閉された室内に風が渦まき、梢の身体が床から浮き上がる。そのままふわりと祭壇の上に乗り、平たい岩の上に尻をついた。

右手にピンクのバトンが出現した。今回は呪文を省略して、すぐさま赤い魔法少女スタイルに変身する。

「魔法の天使ルルイエ・ルル一気に浮上！　地球の」

まだ名乗りの途中で、正実の肉塊の表面から、数えきれない触手が生え、ルルに殺到した。触手に打たれた右手から、バトンが飛ばされ、アスファルトに転がる。

「しまったわ！」

はじめて聞くルルの後悔の言葉に、奈緒也は衝撃を受けた。どんなことがあろうとも無敵の存在だと信じていたルルの手足に次々と触手がからみつく。

襲われたのはルルだけではない。奈緒也にも、梢にも、そして亜理紗にも、触手が巻きついてくる。

ルルが使う白くすべすべした触手とは違い、恐ろしくグロテスクだ。ひとつの肉体から生えているのに、一本一本の色も形状も異なる。様々などぎつい色の触手の表面には、大小のイボや瘤、乳首にも似た突起、ミミズの群れのような繊毛など、人間の生理的嫌悪感を煽るものがびっしりと生えている。

ルルの触手は最初から平気だった奈緒也も、正実の触手に衣服の上から触れられるだけで、鳥肌が立った。さすがに梢は声を出さないでいるが、亜理紗が金切り声の悲鳴をあげつづける。

奈緒也は、すぐとなりでぐるぐる巻きにされた梢にたずねた。
「梢、触手をなんとかできないか？」
梢は哀しげに首を振った。
「無理よ。力を封じるリングをはめたままだもの。今日一日はただの人間よ」
正実が眼鏡を妖しく輝かせて、首をわざとらしくグリンとまわす。
「ふん、おまえたちの相手をするのは後だね。まずはルルが恥をさらす姿を、ゆっくりと見物するがいい」
ルルの小さな身体が、触手の束に空中に持ち上げられた。華奢な両腕が、頭上に差し上げた形で固定される。
両脚はM字開脚の形に割り広げられ、ミニスカートも巧みにめくられた。奈緒也も見たことがない純白のかわいいショーツがあらわになってしまう。
「くうっ！」
ルルはくやしげに唇を噛み、四肢から触手をふりほどこうとするが、みじめなポーズの全身がゆらゆらするだけだ。かえって股間のショーツをさらに前に突き出し、いっそう羞恥の姿勢を強調するはめになった。
ルルの大開脚の恥態を、正実が正面から見つめて、ケラケラと甲高い哄笑を自作の空間に響き渡らせる。

「無駄さ、無駄さ！　ぼくの触手には、魔力を消す力があるからね。この触手で、韻ヶ埼にはびこる妖怪どもの力を奪って、屠ってやったのだからね」
ルルは唇を開き、嘲りの声を正実にぶつける。
「あらら。韻ヶ埼に妖怪があまりいないのは、正実が掃除をしてくれていたからなのね。韻ヶ埼の支配者として、ボランティア活動に感謝するわ」
「ヨグ・ソトホートの超次元の力にかかれば、クトゥルフの娘もそこらの雑魚妖怪となにも変わらないのさ。さあ、海の神の娘よ、みじめで淫らな姿をさらすがいい！」
赤い服の中へ、比較的細い触手が潜りこんでくる。
ルルが一度は開いた唇を、また噛んだ。
「くううっ……」
服の下で、触手が蛇のように蛇行し、表面にびっしりと並ぶイボイボで素肌を刺激する。それだけで昨夜処女を失ったばかりルルの胴体に、ピリビリと電流が走った。
「……あ、ああ、んっ！　こんなの、ちょっとくすぐったいだけよ！　このわたしが、触手に感じさせられるわけがないわ」
「その減らず口を、いつまでたたいていられるかなあ」
左右の胸に、二本の触手が到達した。ぬめぬめした先端が開き、チューブ状の口が現れた。周囲には細い繊毛を生やしている。

昨夜もついに奈緒也に見せなかった、二つの小さくて愛らしい乳首に、それぞれ触手の口が吸いつく。口がすぼまり、強烈に吸引される。

「はくぅぅうう！　きゅやああ！」

引きちぎられる勢いで、左右の乳首が同時に吸引される。チューブ触手の中で、小粒の肉突起が、みるみる引き伸ばされた。普通の女の身体なら、あっさりと乳肉ごとむしり取られていたかもしれない。

神の娘ゆえの頑強さが、皮肉にも乳首への猛々しいまでの快感を産んだばかり。

ルルは昨夜の奈緒也との交わりで、はじめて自分の肉体の官能を知った。まだ慣れておらず、制御のできない肉の悦びが、他者からの触手責めでまばゆい火花を散らす。

「はゆっ！　む、胸が、わたしの胸が、吸われて、ちぎれちゃくぅぅうう！」

乳首は、ただ吸い上げられているだけではない。何倍もの長さに引き伸ばされた幼い肉筒に、強靭な粘膜のチューブが密着し、うねうねと揉みたてられる。左右の乳首が右に左に変形させられるたびに、新たな快楽の炎が轟々と噴き上がった。

乳首のまわりでは、多数の繊毛がうねうねと蠢き、わずかにふくらむ微乳を、人間には不可能な繊細さと苛烈さで愛撫している。繊毛の束が肌の上を走り、筆でなでられるように刺激された。同時に、繊毛の極細の先端でチクチクと皮膚をつつかれ、まるで毛穴を犯されているような刺激が、すべて快感を生みだす。

凄惨にして淫靡な乳首責めに、幼い胸の刺激がピリピリとまぶされる。ルルは声を出すまいとするが、ひとりでに唇が開き、声帯を震わせてしまう。
「んっ、んみゅっ、ダメえっ！　乳首を吸われて、胸をつつかれて、どんどん気持ちよくなっちゃう！　くきっ、きゅふぅぅぅう――――っ！」
必死に快楽に耐えようとする表情は、幼げな美貌であるために、愛らしく、いっそう妖しい淫らさをかもしだしている。ブルブルと薄い胸をわななかせるルルの姿を、正実の眼鏡が視線で犯し、粘つく感想を評した。
「クトゥルフの娘の胸は、ちっちゃいくせに感度抜群のようだねえ。白いショーツの中も感じやすいのかな」
ショーツの左右のレッグホールから、何本もの触手が潜りこんでくる。
「そ、そこは、きゃひゅゅい、入ってきちゃふぅぅぅっ！」
あきらかに亀頭を模した先端を持つ触手が、平らな恥丘の中心に押し入った。小さい秘裂が、奈緒也の勃起よりも二まわりも太い触手で、容赦なく割られる。
ほんの小さな膣口が、容赦なくギチギチと拡張された。
「太い！　太すぎっ！　きゃきぃぃ、太しゅぎゅるふぅぅぅ！」
神の娘でなければ、本当に肉が裂けて、内臓を散乱させていただろう。まだろくに濡れてもいない粘膜を、凶暴な怪物がえぐりたてていく。

「壊れるぅ！　壊れちゃうぅぅ！　膣が裂けるのおおおおっ！」
ギチッ、ギリリッ、グチィィイッ！
ギュグググ――――ッ！
濡れた音ではなく、肉と粘膜があげる悲鳴が、閉じた空間に反響した。
「ルル――――ッ！」
奈緒也が叫び、縛りあげられた身体をよじらせる。ルルの腹がぼっこりと盛り上がるのが映った。触手が膣の中から押し上げているのだ、とおぞましい事実に、いやでも気づかされてしまう。
「今にもルルの腹が破れそうだ。くそ、くそくそおおおっ！」
眷属である自分の非力さに怒る奈緒也の前で、さらなる陵辱が開始された。ショーツの中でうねるもう一本の触手が、尻の谷間の奥に侵出する。膣に押し入った触手に押されて、硬くすぼまっている肛門に、先端がドリル状になった触手がねじりこまれる。
「ひきゅゅうぅあ！　かっ！　うゆ！　お尻が、お尻かはっぁあああ！」
快感と呼ぶには壮絶すぎる刺激が、膣と腸をそろって揺さぶる。膣の触手は生きたバイブレーターと化して、体組織がつぶれるような振動を送りこんできた。肛門から尻の中に潜入した触手は、生きたドリルとなって、ギュルギュルと腸壁をねじられる。
「前もほっぉおう、お尻もぉぉ――――、こっ、こわしゃれるひゅうう！　くきゅっんん

んぅぅう！」

ルルが叫んだ通り、触手はもはや犯すのではなく、小さい女体を破壊しようとしている。崩壊のカウントダウンをギリギリと刻まれながら、なおもルルは人外の肉悦を味わわされる。触手が蠢くショーツに、様々な体液の染みが広がり、とろとろと滴が垂れ落ちた。

ちぎれるほどに引き伸ばされる左右の乳首。

今にも裂けそうに広げられた女性器。

ねじ切られかける尻の奥。

すべてが破滅的に気持ちいい。

「こわれりゅうっ！」

ルルの身体が振動した。手足を拘束する触手を引きちぎるばかりの激しさで、前後に揺れる。

「イッちゃう！」

頭が背後へのけぞり、絶叫を噴き上げる。

「ふゅゅゅゅゆゆあああぁぁあっ！　こわれりゅぅぅう！　イッきゃふゅゅゆゆ――――――っっつっ!!」

「イッたぞ！」

正実が笑い声を爆発させ、肉塊から伸びる触手の束をうねうねと蠢かせる。

「ルルがイキやがった！　ははははははは、もっとイカせてやる！　何度も何度もイキ狂わせて、絶頂の中でクトゥルフの娘を内側から引き裂いてやるからね！」
「やめろ、正実ぃぃ――――――っ！」
奈緒也が絶叫した。その叫びが終わる前に、身体が緑の鱗に被われる。無我夢中で身悶える身体が、まるでヌルヌルの鰻が腕から逃げるように、ちゅるるんすぽーんと触手の縛めから滑り飛んだ。
「えええええ⁉」
（変身した！　ルルの魔法がなくても、自力で深き者着ぐるみになった！　それもいつもよりヌルヌルしてる。いや、驚いてる暇はないぞ）
「奈緒也、なにしてやがる！」
気色悪すぎる触手が何本も、奈緒也に襲いかかってくる。しかしぬるぬるの鱗に触れて、すべて滑ってしまい、巻きつくことも、捕まえることもできない。
「うおおお――――――っ！」
奈緒也は頭からアスファルトにつっこみ、つるつるとスライディングして、落ちているピンクのバトンをつかんだ。不思議と自分の手で握るのは滑らない。
水面から跳ねるイルカのように立ち上がり、バトンを投げる構えになる。
正実も甲高くわめき、触手の大群を向かわせる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

あとみっく文庫
這い寄る混沌がついに登場!?
魔海少女ルルイエ・ルル2
羽沢向一
挿絵／ピエール☆よしお
学園祭に盛り上がる海神の娘。ルルとクラスメイト達。しかし、そこに這い寄る混沌によって事態は一層正気を失う方向へ！　模擬店のメイド喫茶やお化け屋敷、ライブステージを巻き込んで、クトゥルフとハストゥールの娘コンビを襲う、ひどく性的で人智を超えた名状しがたき物語、華麗に再浮上！
2010年10月29日発売!!

仙獄学艶戦姫 NOBUNAGA!

ノブナガッ! comic

待たせたな

信長が、秀吉が、義元が、エッチにバトルにと漫画で大活躍！
もうひとつの『仙獄学艶戦姫ノブナガッ!』がここにある!!

毎月中旬
発売!!
18歳未満の方は
購入できません
18

漫画：老眼
原作：斐芝嘉和
キャラクター原案：SAIPACo.

戦うヒロインが屈服させられちゃうアンソロジーコミックス
『闘神艶戯』偶数号にて連載中！

編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208
http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円（税込）

女幹部メル様のセカイ征服計画！

［小説：高岡智空／挿絵：鈴眼依縫］

全国書店で好評発売中

悪の秘密結社vs正義のヒーロー

イケない戦いの記録！

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

［小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃］

全国書店で好評発売中

「…藤田君は責任取るべき」

睦月への想いに身を焦がすマキナ

彼女は夜の教室で……!?

宇宙海賊学園ブラックキャット

［小説：Kyphosus／挿絵：さしまかよ］

全国書店で好評発売中

生徒会長の裏の顔は宇宙海賊!

海賊少女の痴態が宇宙を駆ける!?

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙獄学艶戦姫ノブナガッ! ①〜③
- 呪詛噛らい噛【カースイーター】
- 魔海少女ルルイエルル
- 借金お嬢クリス ①〜3
- 無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- BLANGEL 輪になりて踊る愚者の夜
- ビルグリムメイデン ①〜②
- 不死の吸血鬼がドSのご主人様を募集しているようです
- 絢爛!帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！
第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園――西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!!　平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたりで、とんでもない方向に進んで――!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 弐
北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾〈美姫〉景虎、宇佐美〈奈々〉定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!!　敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 参
信玄、出陣！

北宮学園の生徒会長選挙戦も大詰め。肉欲に堕ちた義元と氏康を従えた景虎は、更なる戦力の拡大を図る。そんな中、信玄は元凶である按針を倒そうと信長に協力を求め、聖ジョウントのエリザは封印された化け物を発見する。様々な思惑が交錯する物語は佳境を迎え、信長は姦落の危機に陥るのだが!?

小説●斐芝嘉和
挿絵●SAIPACo.

全国書店で好評発売中

BLANGEL
輪になりて踊る愚者の夜

月下の街を紅に染め上げる、鮮血のサスペンスアクションの幕が上がる! 吸血姫アリシアは異形の生物「被験体」の影を追って戦い続けるが、予想もしない反撃に遭って虜囚の辱めに晒されてしまう!! 『隔月刊コミックヴァルキリー』の長期連載人気漫画が待望の小説化!

小説●夜士郎
原作・挿絵●渡瀬行人

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田睦月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった！　ごく普通な少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する!

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

思春期なアダム2 背後をねらう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、睦月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たな刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱！“蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、睦月も新たな局面に…?

小説●さかき傘
挿絵●天海雪乃

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

あとみっく文庫 既刊情報

借金お嬢クリス
42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円！　クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに！　果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

借金お嬢クリス2
42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル!?　水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍（?）に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸
挿絵●了藤誠仁

全国書店で好評発売中

詳しくはKTCのオフィシャルサイトで http://ktcom.jp/

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト http://ktcom.jp/

title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』 トキサナ

『ドSの流儀』 chaccu

『生徒会長前哨戦?』 天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉

電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中!

※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!